

審査の結果の要旨

氏名 大滝世津子

本論文は、従来、社会学のジェンダー研究では対象とみなされにくかった幼児期の性自認の社会的な解明に挑戦したパイオニア的な研究である。

従来、社会学・教育社会学の分野では、外部社会におけるジェンダー秩序がいかに隠れたカリキュラム等を媒介として学校教育の場で児童生徒のジェンダー意識の形成やジェンダーの再生産に関与しているかを中心に、多くの研究がなされてきた。それらは、教育の権力性や階層再生産等の伝統的な社会的関心領域につながるものであった。

だが、幼児期における初期の性自認に関する考察は、心理学的研究が援用され、一種の学問的棲み分けが行われてきた。こうした中、本論文は、幼稚園における3歳児の観察、男女別呼びかけの実験、保育者のインタビュー、アンケート調査を行い、性自認（本研究においては「オトコノコ・オンナノココっちに来て」という性別カテゴリーによる呼びかけに応じることを指標とする）の成立段階において既に、男女の性別カテゴリーが男女間の集合的序列化と結びついていく過程を、幼児・保育者の相互行為の視点から考察した。その意味で、本研究は、性自認が成立する時期を空白期間とみなし、それ以後の性役割の獲得等を問題にしてきた社会的な枠組みが、初期段階の性自認が持つ学問的重要性を看過してきたことへの鋭い問題提起となっている。

本論文の構成は、第一章では、キー概念の定義、第二章では対象幼児の性自認パターンの過程が把握され、第三章では、「性別」「年齢」等の要因や幼児同士や幼児と保育者との相互行為パターンとの関係で性自認が分析され、第四章では、幼児と保育者の相互行為について、性自認の成立期と保育者が発する性に関連した言葉（例 女の子、かわいい）や幼稚園で経験したできごと（観察）との関係が分析されている。第五章では、幼児同士の相互行為が同様に分析され、第六章では性自認のゆらぎが見られる事例を取り上げ、第七章では、男児、女児の集団がクラスの中に形成されるプロセスと性自認との関係が分析され、幼児の性別集団化の中で、異性の排除やステータスの高い幼児によって性別カテゴリーが集合的行為の中で使用されることが幼児の性自認を促す一因であることが示唆されている。第八章では、保育者が性別カテゴリーを男女の差異を示すものとして用い、それが幼児の相互行為の中で、序列としての意味を獲得していくプロセスを分析している。第九章では、各章を統合し、集合的行為としての性自認のメカニズムを分析している。

本研究は以上のように、心理学の関連研究から学びながらも、集団的な相互行為として保育場面における性自認の形成メカニズムを社会的な枠組みから分析し、従来のジェンダー研究が前提とする枠組みに変更を迫る、極めてオリジナリティの高い研究となっている。以上により、博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達しているものと認められる。